No.56
2024.12.6

新城市文化協会
ホームページは
▼こちら▼

新城文化

書　村田華城

編集・発行　新城市文化協会

本年度市民文化祭 文化展開催（報告）

副会長　金子　賢次（華石）

当文化協会年一度の総合発表会である本年度市民文化祭（文化展）が去る10月25日(金)から27日(日)まで新城文化会館で盛大に開催されました。長かった残暑も終わり秋たけなわの好時節、天候にも恵まれのべ約4，500名の来場をいただきました。

展示内容はほぼ例年と同様で、1階は盆栽双葉会展、盆栽入門講座作品展、菊花展、諸流花展。2階は美術展、書道展、水墨画展、デザイン切り絵展。3階は写真展、俳句展、短歌展、入門講座小品展（書道・パステル画・色鉛筆スケッチ画）、和のアート展～きもの遊び・帯結び～、しんしろ文化財に親しむ会展、特別展示①「新城と新美南吉展」、同②「新城の能装束縫箔写真展」と全クラブ団体が日頃の研鑽の成果を発表。どの会場もそれぞれ特色があり、会員の皆様の熱意と工夫が感じられ楽しく有意義な3日間でした。以下、かいつまんで個人的な所感を記します。

○「菊花展」は今年も異常高温のため花が咲かず不本意な展示となってしまったと菊友会会長の弁。1年がかりで精魂込めて育てた菊、開花の調整の難しさを伺いご苦労のほど察して余りあります。

○「俳句展」は、写真クラブとのコラボ作品がビジュアルな効果を生み、見ごたえがありました。

○「きもの研究会」による「着物で過ごす和の時間～無料着付け体験～」では、着物のお嬢さんが各会場を訪問、臨時撮影会と相成り静かな会場に華を添えていただきました。

○103室の盆栽、303室の絵と書道の「入門講座小品展」はいわば「文協入会予備軍」の皆様の力作展。書道には高校生や大学生の参加もあり、若々しい意欲と希望を感じました。「2階の書道展はやや難しいのが多いが、この部屋のはわかりやすくて『ホッ』とするなー」との感想もいただきました。

○304室では地元の貴重な文化財の調査研究成果をパネル展示、時間がいくらあっても足りない思いでした。また、豪華で美しい能装束の展示には息をのみました。

○「デザイン切り絵展」の休憩室は昼食時には満室になるほどの賑わい。壁面の切り絵作品が安らぎを与えてくれました。

ご多忙の中わざわざご来場いただいた方々、本展開催にご協力いただいた会員の皆様に厚くお礼申し上げます。

秋の市民芸能祭を終えて

副会長　河合　秀明

今年初めて芸能部の責任者として進行役を担い、すべての演目を拝見することができました。その感想を述べてみたいと思います。

最初に登場したのは、覇城太鼓の皆様です。川路地区の小学生8名が力強くたたく太鼓に圧倒されました。曲は設楽原の戦いを素材にしたオリジナルとのことですが、個々のばちさばきは見事でした。

覇城太鼓

次は新城狂言同好会の「腰祈」です。内容は腰の曲がったお年寄りを祈祷師が治すというものですが、加減がうまくいかず、腰が伸び過ぎたり、反対に曲がり過ぎたりを繰り返し、とうとう最後には怒り出すという話です。私の父親も腰が90度に曲がっていて、歩いていると前の人にぶつかったという話を思い出しました。

大正琴は3団体が演奏しました。感心するのは、曲のアレンジがすばらしいことです。私も吹奏楽団に所属していて色々な曲を演奏するのですが、心から楽しませていただきました。

民踊研究会は、お馴染みの演目が多くあり、特に「越中おわら節」は私が若い頃初めて富山に転勤となり、八尾で風の盆を見た情景を思い出しました。

おことの会には私の勉強不足を痛感する思いです。ほんとうに芸術性の高い演奏を聞かせていただきました。

フラダンスの皆様は100名が次々と揃いの衣装で踊られ、圧巻でした。笑顔がすばらしかったです。

今日は舞台袖から、楽しい一日を過ごさせていただき、ありがとうございました。

吾妻流　闘季の会「義太夫　酒屋の段」

県文連東三河部 芸能大会に参加して

能楽協会　新城能楽社　今泉　英二

新城の祭礼能は元文元年（1736）新城城主三代菅沼定用（さだもち）公の家督相続を祝い町衆が富永神社の社殿に能（舞囃子）を奉納したことに始まります。以来290年近くを伝統継承しています。

シテ、ワキ、囃子、狂言の演者の全てが素人の町衆で江戸時代の本格的な檜造りの能舞台や能面・能装束を使ってこのように演能が行われているのは全国でも珍しいことです。

今回、東三河部芸能大会で能装束を付けることができず袴能という形でしたが新城の伝統文化の一端を紹介させていただくことができたと大変感謝しております。祭礼で使う能装束の損耗や高齢化による後継者不足という課題を抱える中、次の世代に伝統を引き継いで行くことが、今いる我々の使命と改めて感じました。

県文連東三河部 芸能大会に参加して

新城吹奏楽団　団長　河合　秀明

5年に1度めぐって来る東三河部の芸能大会が、令和6年度は新城市で開催されました。開催地の特権で新城吹奏楽団はプログラムの最後を飾ることとなりました。

演奏曲目は①日本の情景「夏」②トランペット吹きの休日③組曲「山里」より「祭り」④キャラバン⑤エルザの大聖堂への行列の5曲でした。

なるべく親しみやすい選曲をしたつもりですが、3曲目の「山里」は当団の生みの親でもある故山本家寛先生が、新城吹奏楽団創立30周年を記念して作曲された思い出深い曲でした。

これからも、新城市文化協会のメンバーとして、より活発な活動をしていきたいと思います。応援の程よろしくお願い申し上げます。

私の絵画制作について

新城美術協会　谷口　茂春

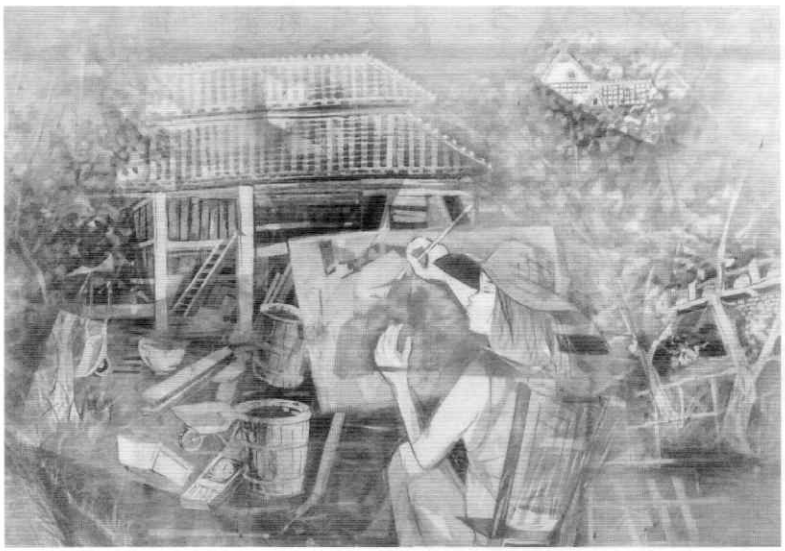
時速300キロで走る新幹線で、月まで63日、火星まで26年、太陽系のはずれ海王星まで1700年、そして太陽までが57年もかかるそうです。

宇宙空間の広さに比べわれわれの人生はとても短いです。そしてこの短い一生で人は何をするでしょうか？

そんな答えの出そうにない命題に向かって、私はたまたま絵を素材にして答えを見出そうと考えています。今回県展には、「流れ去る時」という染めの作品を応募しました。

人の営みは、常に同じ処にとどまることなく流れ去り、次に、また新しい何かを目指し前へと進まざるを得ません。

そんな運命を、今回は使い古され忘れられた小屋（かつては小屋の周りで子どもたちが遊び、大人が農作業に汗を流していた）とその小屋をスケッチする人を描くことで、その場面の持つ記憶や時の流れとして表現しました。



絵を描くことは己の心の想いを表すことだと考えます。しかしながら自分の想いどころか、自分が満足できる作品をまだ1枚も描けておらず、今なお追求しています。

上手とか下手とか言われがちな現在では話にならないですね。

愛知県文連美術展に出展して

書道クラブ　潤　玲鳳

今年の愛知県文連美術展も私の好きなジャンルである篆書体（金文）を使った作品で出品をさせていただきました。

昨年と違い今年は篆書四文字を縦一行に書いた作品で出品をいたしました。小字数であるが故に一文字一文字の印象が強く、変化を持たせるため文字を作る構成から考え同じ構成の文字が並ばないことを念頭に置き題材を選びました。

今回、作品に起用したのは金文といい殷周時代から秦漢時代頃までにつくられた青銅器の表面に鋳込まれ刻された文字になります。

篆書体は五書体の中でも一番古い書体になり今から約3300年前に生まれ千数百年使われてきた書体になります。篆書体は秦の統一前の大篆、統一後の小篆と大きく2種類に分けられます。小篆は現代でも実印、パスポートの表紙など重要な物に使用されているので皆様も一度は目にしたことがあるかと思います。特長としては縦長で、等圧等速左右対称なのがあげられます。それに比べ大篆は装飾性が高く秦統一前ということもあり地域などによって多少、文字の違いなどもみられます。

文字は物の形、風景、仕草が元になり絵のような形から現在の文字まで進化をしてきました。そして篆書体は、一番古い書体であるが故にそれらの影響が一番強く表れています。

私は専門学校生時代に篆書に出会いそして魅了され今でも大好きな書体です。しかし大好きなだけでは作品を制作することはできません。篆書の歴史、種類、特徴を勉強し理解して初めて作品が制作できるかと思います。私もまだまだ勉強不足で篆書体の全てを知っているわけではありません。「大好きな書体」から「一番詳しい書体」と言えるよう勉強していきたいと思います。

私は幼少期から書道をやっていて現在では書道家として活動しています。

近年では電子機器が普及し、「書く時代」から「打つ時代」に変化しています。文字を書くのは時間がかかり面倒で電子機器を使った方が効率がいいのは確かです。しかし手書き文字にも良さがあり、気持ちを伝えるには一番かと思います。

私は大切な書道文化を守っていく為にも魅力や面白さを活動を通して伝えていけたらと考えております。

文協歌壇

夜の闇に紛れ電柵潜り抜けしか猪の親子ら田を荒らしけり
牛倉　浅井　淑裕

かずしれぬ蝉が脱皮し　かずしれぬ蝉のいのちが終はるひと夏
平井　伊東　文弘

この辺りに雛は居るはず餌を咥え野の道雲雀は車を躱す
杉山　今村志づ江

わが体内の血潮が体外に現れる人工透析とはすばらしきこと
緑が丘　大谷　将夫

わらび発たけのこ経由柏餅わらしべ長者になれずともよし
長篠　倉橋　正敏

旧友のリハビリ毎日はげんでいますそんな返信受ける秋の日
庭野　小林　逸子

早苗鳥鳴けば思はゆ昭和の世の「結」の田植ゑの辛さ忘れず
副川　佐々木とし子

足早に過ぎゆく日々に戸惑ひぬ何もなさずに一日は過ぐ
町並　鈴木　由路

認知症に動けぬ体新コロナお前は何処に私は此処に
海老　遠山　耕治

梅天の雨間に鳴ける老鶯の谷渡りの声鬱を晴らせり
庭野　松井　董子

ストーブをひとり占めして新聞を広げ静かな今日の始まり
町並　村田　久子

ごろごろとからだ横たえ読む新聞風吹き抜ける気に入りの場に
平井　山本　京子

名月や年経る度に想ひ出づ友と愛でたる月見の宴
屋敷　渡辺　礼子

コンバインの稲刈る音と響き合う運動会の行進曲は
高里　加藤　絹江

バスを待つつめたき風に少女らは指いきいきと手話くり返す
田代　竹下　博子

文協俳壇

別れあり出会ふもありの春の雲白薔薇や匂い残して崩れゆき
橋向　吾　季　良

椅子一つ逝きし翁の夏畑水澄みて川の岩陰雑魚を見つ
富永　今泉眞紗子

受け流す夫の一言秋の風星流る人知の行き着く先見えず
本町　大原　綾子

新年の大地揺るがす竜の鱗葉屑の落つる玄関つばめ来る
橋向　小沢　清子

はき寄せる終の色どり木の葉かな褐色に暮れゆく湖底水涸るる
菅沼　加藤有美子

人類は戦定めか蛇苺ほたるいか地震の海生き市場かな
豊川諏訪西　好　日

暮れかかるプラットホームに秋思降り女郎蜘蛛立冬の朝姿消し
黒瀬　駒田孫三郎

幻のごと曼珠沙華ひとつ咲き沈丁の香を秘め固き蕾かな
東沖野　米谷　実紀

おき石のまわり静けし石蕗の花式部の実そっと手にふれ露もらう
大野　下江とき子

瓦礫おこす肩に降り積む雪しんしん太刀魚のすり身ふんわり澄まし汁
上平井　長坂　真澄

水中花手元近くにペンと紙神寂びて幣のゆれいる木下闇
川田　濱口　恭子

夕闇に瀬音の響き天の川春暁や淡き夜灯の道祖神
海老　原田　静子

春愁や朝の光のすり硝子木下闇風の息だけ通りゃんせ
大野　牧野和英子

薫風や棚田裾まで青く揺れ老桜の鬼女を隠してしだれをり
宮ノ前　亀甲　昌明

編集後記

秋を迎え文化協会各分野の活動も活発に行われていますが、ここでは紙面の都合上その集約点とも言える文化祭（文化展・芸能祭）を中心にした紹介（1・2面）、本協会が担当した東三河部芸能大会（2面）、県規模での美術展（美術工芸・書道部参加）の感想（3面）を中心にしか紹介できませんでした。ご了承ください。その他の活動については、本会のホームページ（QR）などでお調べ、または事務局へお問い合わせいただければ幸いです。この号では紹介できなかった活動などや今後の取り組みなどは次の年度末号で鋭意工夫努力してお知らせしたいと思います。最後の4面にはしばらく紹介できなかった歌壇俳壇を載せました。ご鑑賞ください。（亀　甲）

新城市文化協会事務局
新城市字下川1の1
☎23－7656